

宮崎県教育研修センター

主体的に行動し、やりぬく力を身に付けた児童の育成
～小学校におけるキャリア教育の推進を通して～

研究員 谷口 勝義
研究実践校 日南市立東郷小学校

I	研究主題と副題	15	1
II	主題設定の理由	15	1
III	研究目標	15	1
IV	研究仮説	15	1
V	研究構想	15	2
VI	研究の実際	15	2
1	研究の基本的な考え方	15	2
2	意図的に関連付けたキャリア教育に関する指導計画	15	4
3	「生き方に役立つ力」を伸ばす手立ての工夫・改善	15	4
4	「生き方教育」の実践	15	5
VII	成果と課題	15	9
○	引用・参考文献	15	10

自閉症のある生徒の主体的に活動する態度をはぐくむ学習支援を目指して
～「自立活動」の視点を取り入れた実態把握と学習指導を通して～

研究員 今村 昭仁
研究実践校 宮崎県立延岡しろやま支援学校

I	研究主題と副題	15	11
II	主題設定の理由	15	11
III	研究目標	15	12
IV	研究仮説	15	12
V	研究構想	15	13
VI	研究の実際	15	13
1	研究の基本的な考え方	15	13
2	「指導・支援」と「主体的な態度」について	15	13
3	理論研究 自閉症の特性、発達段階、「自立活動」の視点を取り入れた「実態把握表 と指導目標・支援内容表」の作成	15	13
4	事例研究 検証授業の実際	15	15
5	「実態把握表と指導目標・支援内容表」の活用	15	20
VII	成果と課題	15	20
○	引用・参考文献	15	20

I 研究主題と副題

主体的に行動し、やりぬく力を身に付けた児童の育成
～小学校におけるキャリア教育の推進を通して～

II 主題設定の理由

現在、知識基盤社会の到来やグローバル化が進む中、産業構造や就業構造の変化が起こり、若い世代におけるニートや早期離職などの社会問題が指摘されている。また、情報などの技術革新に起因する社会の激しい変化によって、児童をとりまく生活環境も大きく変化している。このような中、国や県は、将来直面するであろう社会の変化に対応できる能力を育成することによって、これからの社会を担う児童が自立した社会人・職業人としてたくましく生きぬくことを目指している。そのために、学校教育に強く求められているのが、キャリア教育である。キャリア教育は、これから生きていく児童が主体的に学びたい、働きたいという思いを実現させていくための教育的働きかけである。

本県においても、「第二次宮崎県教育振興基本計画」の施策にキャリア教育の推進が示されている。国や県のキャリア教育の推進に関する施策に基づき、小学校段階では、将来の進路選択にかかわる基盤形成の時期として、社会人・職業人として自立していくために必要な能力や態度を育てることが求められている。

本校は、平成25年度の小中一貫教育校開校に向けて、平成23年度からキャリア教育の視点を生かして教育活動を見直し、中学校教育への円滑な移行を目指した教育課程の編成と実施に努めてきた。

児童の多くは、学校全体で取り組むボランティア活動に積極的に参加したり、学校生活にも意欲的に取り組んだりしている。しかし、活動への興味・関心があるにもかかわらず、自分がやるべきことに最後まで取り組むことができない児童もいる。また、学校内外での生活や学習において、不得意なことや苦手なことに進んで取り組むことを避けてしまう児童もいる。このような児童の実態を考慮し、主体的に行動するとともに、何事にも最後までやりぬく力を身に付けるためには、キャリア教育が必要であると考えた。

本研究では、キャリア教育を取り入れた教育活動を意図的に関連させることによって、キャリア教育に関する指導計画を作成し、それを基に実践研究を進める。そして、これから生きていく児童に身に付けさせたい力を伸ばすための手立てを工夫・改善していくことによって、主体的に行動し、やりぬく力を伸ばしていくことができると考える。また、本研究を進めることは、本校の教育目標である「思いやりの心を持ち、たくましく生きる児童の育成」の具現化を図る上でも意義深いと考え、本主題を設定した。

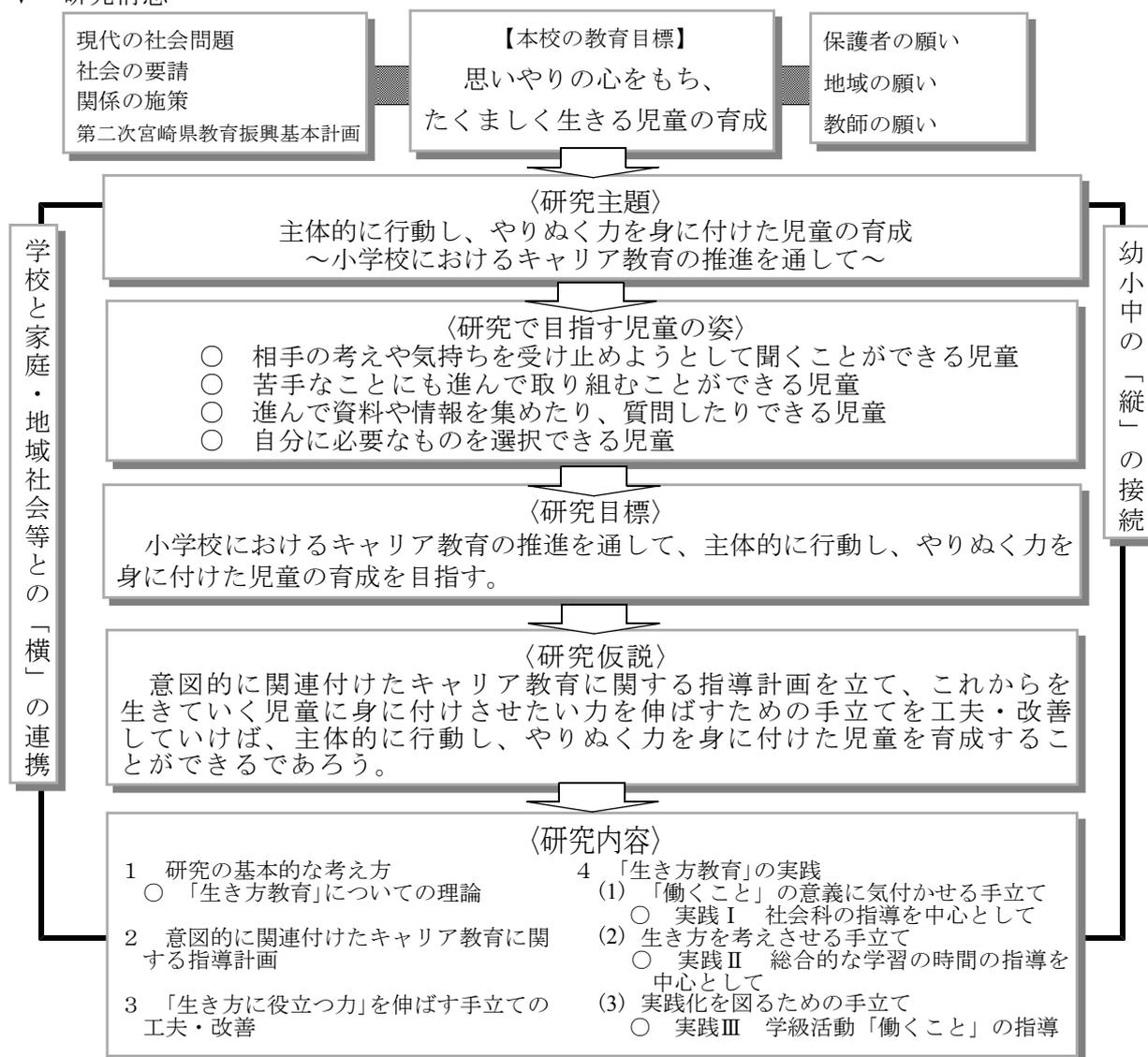
III 研究目標

小学校におけるキャリア教育の推進を通して、主体的に行動し、やりぬく力を身に付けた児童の育成を目指す。

IV 研究仮説

意図的に関連付けたキャリア教育に関する指導計画を立て、これから生きていく児童に身に付けさせたい力を伸ばすための手立てを工夫・改善していけば、主体的に行動し、やりぬく力を身に付けた児童を育成することができるであろう。

V 研究構想



VI 研究の実際

1 研究の基本的な考え方

(1) 主題

主体的に行動し、やりぬく力を身に付けた児童の育成 について

「主体的に行動し」とは、学校生活や学習に進んで取り組もうとする態度である。
「やりぬく力」とは、困難や苦勞を乗り越え、最後まで行動できる力である。
このような力や態度を身に付けた児童の育成を目指す。と捉える。

(2) キャリア教育

本研究におけるキャリア教育 について

本研究において、キャリア教育とは、児童に、これまでの自分に気付かせ、今の自分を考えさせ、これからの自分にいかすことを見つけさせることによって、「生き方に役立つ力」や態度を伸ばし、自己の生き方の実現を促す教育と捉えた。キャリア教育において、「生き方」に着目した実践を「生き方教育」と捉える。

(3) 副題

小学校におけるキャリア教育の推進を通して

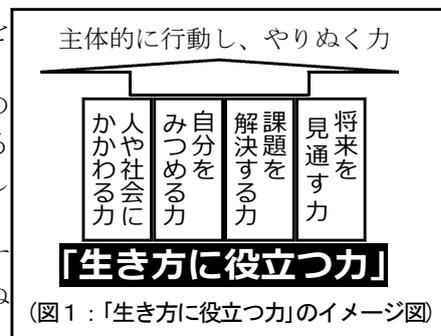
について

小学校におけるキャリア教育の推進を通してとは、「生き方教育」を実践していくことと捉える。

(4) 「生き方に役立つ力」について

本研究において「生き方に役立つ力」とは、これから生きていく児童に身に付けさせたい力と捉える。そこで、「生き方に役立つ力」をキャリア教育で育成すべき4つの力を基にして、「人や社会にかかわる力」「自分を見つめる力」「課題を解決する力」「将来を見通す力」の4つを設定した。(図1)

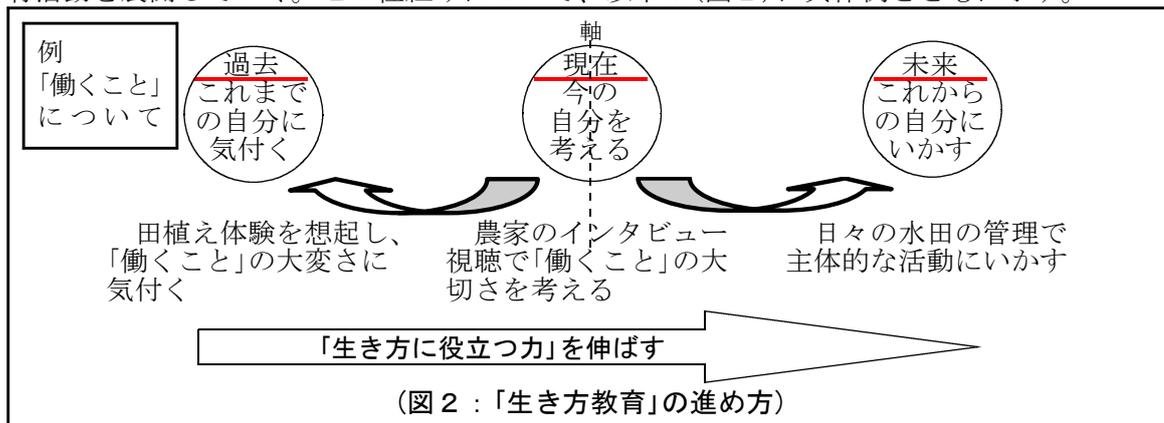
「生き方教育」の視点とも捉えるこの4つの力を伸ばすことによって、研究主題である主体的に行動し、やりぬく力の育成に迫ることとする。



(図1: 「生き方に役立つ力」のイメージ図)

(5) 「生き方教育」の進め方について

「生き方教育」において、児童が、これまでの自分の生き方に気付き、今の自分の生き方を考えることによって、これからの自分の生き方にいかすことができるようになる仕組みで進める。この仕組みにそって、「生き方に役立つ力」を伸ばすために、「生き方」に関連させた教育活動を展開していく。この仕組みについて、以下の(図2)に具体例とともに示す。



(図2: 「生き方教育」の進め方)

(6) 研究で目指す児童の姿との関連について

「生き方に役立つ力」の実態を把握するために、5月にキャリア教育アンケートを実施した。その結果や生き方に役立つ4つの力を基に、「生き方教育」で目指す児童の姿として、以下の4つを設定した。本研究で生き方に役立つ4つの力を伸ばすことによって、目指す児童の姿の具現化を図り、研究主題である主体的に行動し、やりぬく力を身に付けた児童の育成に迫ることとする。

- 人や社会にかかわる力…相手の考えや気持ちを受け止めながら聞くことができる児童
- 自分を見つめる力……………苦手なことにも進んで取り組むことができる児童
- 課題を解決する力……………進んで資料や情報を集めたり、質問したりできる児童
- 将来を見通す力……………自分に必要なものを選択できる児童

(7) 「生き方教育」の評価について

「生き方教育」の評価は、(p15-4 表1)に示すような評価の項目を設定して行う。そのために、「生き方教育」を取り入れた教育活動において、「生き方教育」の視点に基づいて、評価の

項目を設定する。(表1)は、第5学年における具体的な教科・領域等の評価の項目の例示である。

「生き方教育」の視点	評価の項目(教科・領域等)
人や社会にかかわる力を育てること	友達の発表を聞いて、考えることができる(総合的な学習の時間)
自分を見つめる力を育てること	自分を振り返り、生き方にいかすことができる(総合的な学習の時間)
課題を解決する力を育てること	自分の役割の課題を見つけ、解決することができる(学級活動)
将来を見通す力を育てること	日本の生活や米づくりの未来について考えることができる(社会科)

(表1：第5学年における評価の項目の例示)

2 意図的に関連付けたキャリア教育に関する指導計画

意図的に関連付けるとは、「生き方」に着目することによって、関連する教育活動をつなぐことである。関連する教育活動をつなぐことによって、それぞれの教育活動の質を高めることができる。と考える。

本研究における意図的に関連付けたキャリア教育に関する指導計画とは、「生き方教育」を実践していくための指導計画のことである。そこで、「生き方教育」を実践するために、生き方に着目した指導計画として各学年の「生き方プラン」を立てた。以下の(資料1)は、第5学年の「生き方プラン」の例である。「生き方プラン」を基にして、「働くこと」に焦点化(網掛け)した教育活動から「生き方」を考えさせる「生き方教育」を実践していく。

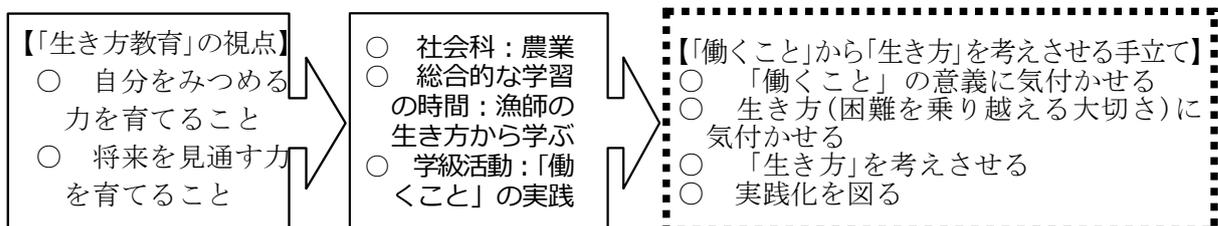
特に、小学校では学級担任のかかわりが大きいので、「生き方プラン」を基にして発達の段階を考慮し、学年の実態に応じた教育活動を焦点化し、「生き方教育」を実践していくことが効果的であると考える。

小学校における生き方プラン(第5学年)		4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3(月)																
生き方に役立つ力	課題を解決する力	総合：米作りの課題を作ろう	家庭：家庭の仕事を探そう	理科：自由研究	社会：情報産業	総合：米の秘密を探ろう												
	将来を見通す力		学活：集会を計画しよう	学活：学期を振り返ろう							学活：学期を振り返ろう						学活：年間を振り返ろう	
	人や社会にかかわる力	国語：ゲストを紹介しよう	体育：ゲーム	国語：立場を明確にして							体育：ゲーム	体育：ゲーム	家庭：楽しい団らん					
	自分を見つめる力	学活：新学年の抱負	道徳：個性伸長	道徳：役割・責任							学級活動：働くこと	道徳：役割・責任					国語：伝記「手塚治虫」	

(資料1：第5学年「生き方プラン」)

3 「生き方に役立つ力」を伸ばす手立ての工夫・改善

「働くこと」に焦点化した教育活動から「生き方」を考えさせる手立てを見出す。手立ての見出し方は、「働くこと」と「生き方」に関連した「生き方教育」の2つの視点を「生き方プラン」のなかの教育活動(資料1の網掛け)に当て、具体的な手立てを設定する。



4 「生き方教育」の実践

(1) 「働くこと」の意義に気付かせる手立て～実践Ⅰ 社会科の指導を中心にして～
 体験活動や教科・領域等のなかにある「働くこと」を関連させ、「生き方教育」を取り入れること
 によって、「働くこと」の意義に気付かせることができると考える。

ア 「働くこと」を実体験させる

第5学年総合的な学習の時間に田植えの直接体験(写真1)を行った。この田植え体験は、勤労の大切さを知り、今後の稲作学習への意欲を高めることをねらった。田植えでは、JA東郷の方に苗の植え方を教えてもらい、水田に足をめり込ませながらも熱心に田植えをしていく児童の姿が見られた。

この田植え体験を通して、児童に「働くこと」の大変さを実感させることができた。



(写真1：田植え体験)

これまで

イ 「働くこと」の意義に気付かせる「生き方教育」の実践Ⅰのつながり…活動①～③

活動①	総合的な学習の時間での体験活動 4月 田植えの直接体験
-----	--------------------------------

つなぐ

今

「生き方教育」を取り入れた社会科の指導 7月9日(検証授業Ⅰ)	
活動②	<p>1 単元名 米づくりのさかんな庄内平野</p> <p>2 本時の目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 日本の米づくりを元気にする提案を考え、表現することができる。【社会的な思考・判断・表現】 <p>3 「生き方教育」の視点…将来を見通す力を育てること</p> <p>4 手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 児童自らが米づくりを体験したことを想起させる。 ○ 農家のインタビュー(写真2)を視聴させ「働く人」の思いや願いに共感させる。 ○ 農業高校の生徒のインターンシップの写真を見せ、農家の「後継者育成」に気付かせる。 ○ KJ法的手法を用いて意思決定の場を設ける。 <p>5 成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 米づくりの提案を全員が書くことができ、社会科学習の目標を達成することに役立った。 ○ 米づくりの未来への思いが高まった。



(写真2：農家のインタビュー視聴)

つなぐ

これから

活動③	総合的な学習の時間での関連学習 7月 日之影の水士里ネットを活用した学習
-----	---

ウ 「働くこと」に意欲をもたせる

「生き方教育」を取り入れた教育活動の充実を図るために、「みやぎの教育」アシスト事業を活用した企業等との「横の連携」として日之影の水士里ネットを活用した学習(写真3)を実施した。総合的な学習の時間において、米づくりに欠かせない農地や水の大切さについて理解を深めることをねらった。

実際に働いている方の具体的な話を聞いたことで、日々の水田の水の管理や観察に主体的に取り組む児童の姿が見られた。



(写真3：水士里ネット)

エ 実践Ⅰの評価

評価の項目…『日本の生活や米づくりの未来について考えることができる』

児童の具体的な感想は、以下の通り(抜粋)である。

- もっと米を食べてもらったり、作る人を増やしたりするためのアイデアを考えました。
- 今日は、米づくりの勉強で短冊に生産量・消費量がどうしたら増えるか考えたことを書いたのでよかった。

全児童の感想のうち、この評価の項目に関連した記述が、約7割を占めていた。

オ 実践Ⅰの考察 (○…成果、●…課題)

- 米づくりの提案を全員が書くことができたということは、本時の手立てが、社会科学習の目標達成を果たすとともに「働くこと」の大切さを理解する上でも有効であった。
- 米をつくることや「働くこと」が、日本の未来を支えていることに気が付くことができたということは、「将来を見通す力」の育成に役立った。
- 学んだことを生かして日々の実践に意欲的に取り組むようになり、主体的に行動しようとする児童の姿が見られるようになった。
- やりぬく力を伸ばすためには、児童の振り返る機会を設定し、困難を乗り越える大切さに気付かせる必要がある。

(2) 生き方を考えさせる手立て～実践Ⅱ 総合的な学習の時間の指導を中心にして～

実践Ⅰの考察からも、困難を乗り越える大切さに気付かせる手立てが必要であった。特に、生き方を考えさせる手立てのなかで、児童に自分を振り返る機会を与え、これまでの自分の生き方に気付かせるようにした。

ア 生き方を語る人材の探し方

地域との「横の連携」を重視し、かつお漁の漁師として生き方を語ることができる人材を①～③の順に紹介を受け、探し出した。

- ①日南市水産林政課 → ②南郷漁協 → ③漁師岩切さん



(写真4：漁師のインタビュー視聴)

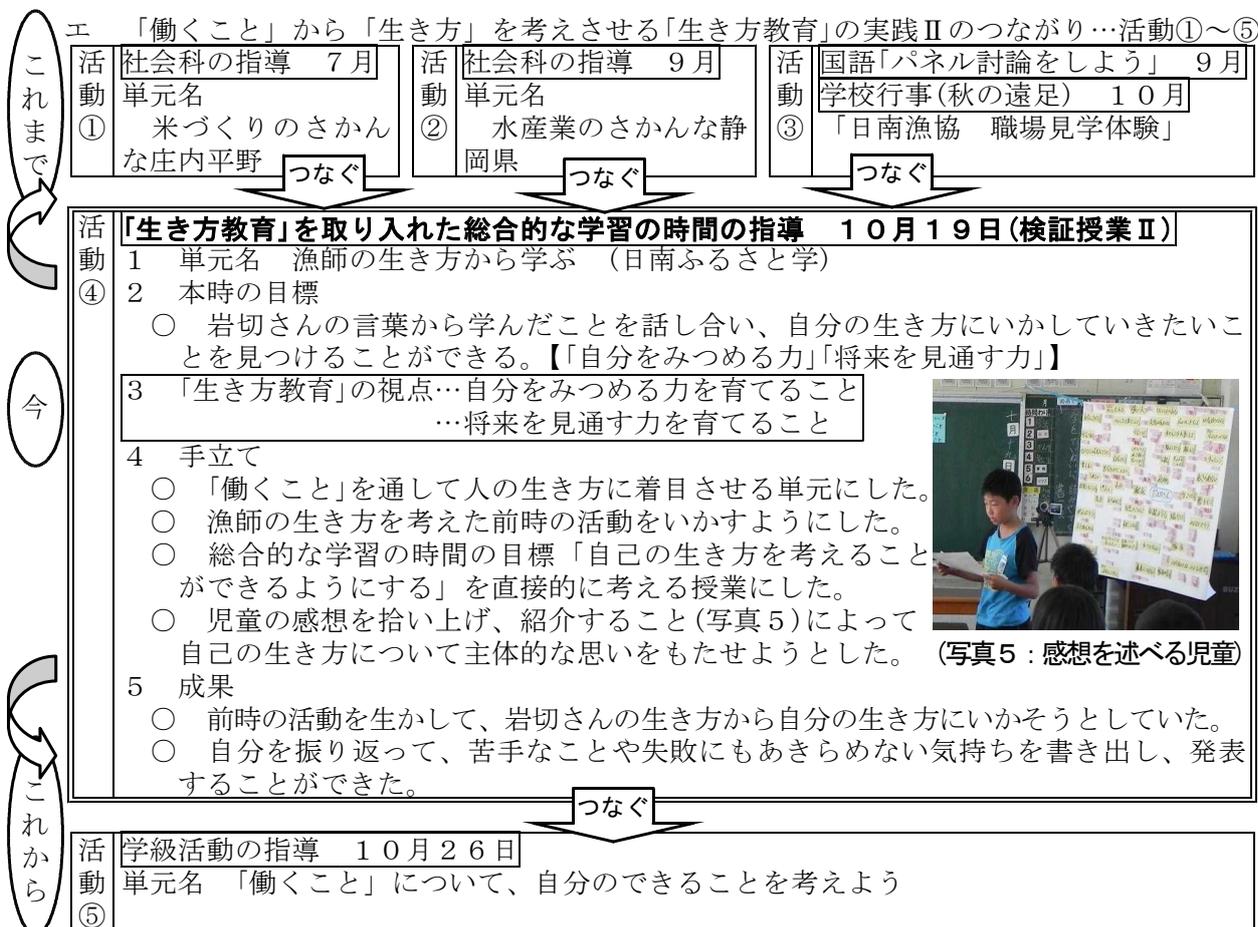
イ 人材との打合せ内容

「自分を見つめる力を育てること」と「将来を見通す力を育てること」を視点にした話にするために、学習の意図を人材である岩切さんに依頼した。

そこで、職業についての話よりも漁師としての生き方の話をさせていただいた。具体的には、「働くこと」の苦勞、苦勞を乗り越えた喜び、船長としての責任などの内容であった。

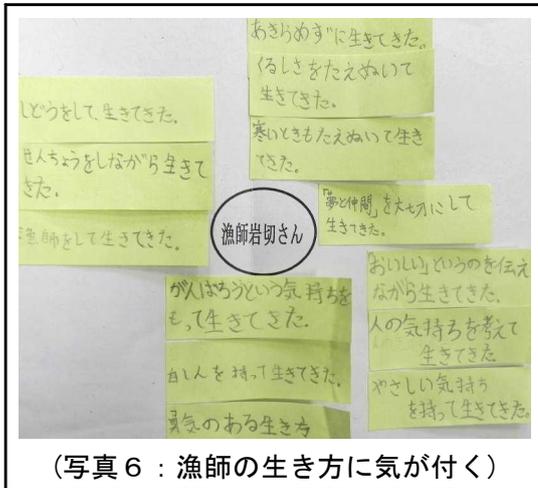
ウ 生き方を考えさせる単元の工夫

「生き方教育」の視点を単元に当て、単元全体を工夫・改善することにした。以下の実践Ⅱの活動④は、全10時間の単元の終末として、直接的に「自己の生き方を考えること」にした。

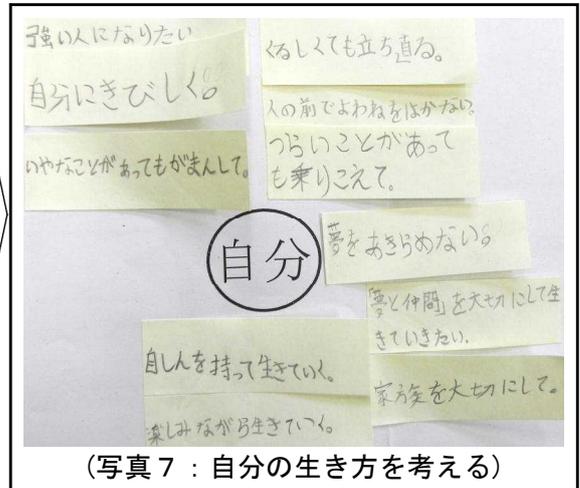


オ 自分の生き方を考えさせるワークシートの工夫

児童は、漁師岩切さんの生き方を考えたことによって、「働くこと」の苦勞、苦勞を乗り越えた喜び、船長としての責任などの内容に気が付くことができた。その気付きをいかして、付箋に自分の生き方を考えた内容を書き出させた。ワークシートには、漁師岩切さんの生き方について考えた方法(写真6)と同様の方法でワークシート(写真7)に付箋を貼っていかせる。児童は、岩切さんの「失敗は成功のもと」や「何があってもあきらめない」、「つらいことを乗り越えていく」などの言葉に感銘を受け、意欲的に自分の生き方を考えていた。



(写真6：漁師の生き方に気が付く)



(写真7：自分の生き方を考える)

カ 実践Ⅱの評価

評価の項目…『自分を振り返り、生き方にいかすことができる』

児童の具体的な感想(p15-6 写真5)は、以下の通り(抜粋)である。

- 今日の学びをいろいろな所で役立てたい。
- この学習を頭に入れていかしていきたい。
- 自分の生き方を今まで考えたことがなかった。生き方はいろいろあると思った。
- 自分の考えをもつことができ、今からいかせることも考えられてよかった。さらに、自分の生活で今日立てた目標を実現させたい。

児童の感想を分析すると、全員が、この評価の項目に関連した内容を記していた。全員が、主体的な思いや前向きな思いの感想を記していたということは、自己の生き方について「主体的な思いをもとうとする」ことができたと言える。

また、自分の生き方を考えて付箋(写真7)に記した児童の言葉を(表2)のように、「生き方に役立つ力」の枠組みで分類したところ、総数149枚の付箋の割合が、以下のようになった。

「生き方に役立つ力」の枠組み	付箋の枚数	割合
人や社会にかかわる力	26	約18%
自分を見つめる力	88	約59%
課題を解決する力	5	約3%
将来を見通す力	30	約20%

(表2：付箋の言葉を「生き方に役立つ力」の枠組みで分類した表)

キ 実践Ⅱの考察 (○…成果、●…課題)

- 「働く人」という「生きた教材」を基に、単元の展開の工夫・改善を行ったことで、「自己の生き方を考えることができるようにする。」という総合的な学習の時間の目標達成を果たすとともに「自分を見つめる力」や「将来を見通す力」を伸ばすことができた。
- 班の話合いから全体への話合いの広がりには、苦手や困難に対しても乗り越えようという意識の広がりを感じられ、「生き方教育」の視点にそった意見が数多く出ていた。
- 付箋に記した児童の意識を「生き方教育」の「生き方に役立つ力」の枠組みで分類し、分析したところによって、評価にいかすことができた。
- 本時の目標であった「自分を見つめる力」「将来を見通す力」に関する記述が8割近くあったということは、教師のねらった意図が伝わり、2つの能力に対する児童の意識が広まったと言える。
- 児童のワークシートなどを「生き方教育」のポートフォリオとして蓄積するだけでなく、これからの実践とも関連させて、継続して活用していく必要がある。また、「生き方教育」の振り返りに生かすことができるようにする。
- 本時の意識の高まりをほかの教育活動へとつなげて、実践化していく必要がある。

- (3) 実践化を図るための手立て～実践Ⅲ 学級活動の時間の指導を中心にして～
 実践Ⅱの考察から、「生き方教育」への意識の高まりを日常の実践に結び付ける必要があった。
 そこで、自分の生き方を考えたワークシートを基に、学校生活での実践を考えさせるために学級活動の授業を行った。

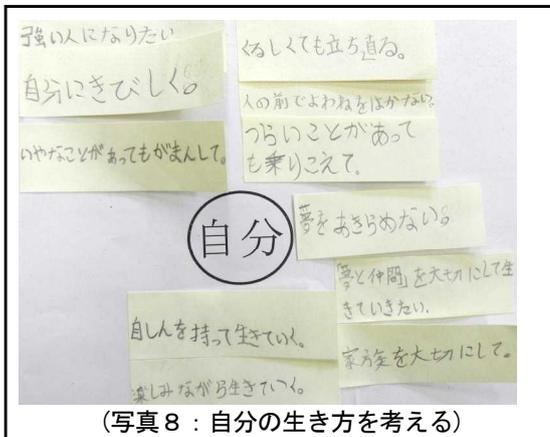
これまで
 ↓
 今
 ↓
 これから

ア 実践化を図るための「生き方教育」の実践Ⅲのつながり…活動①～③

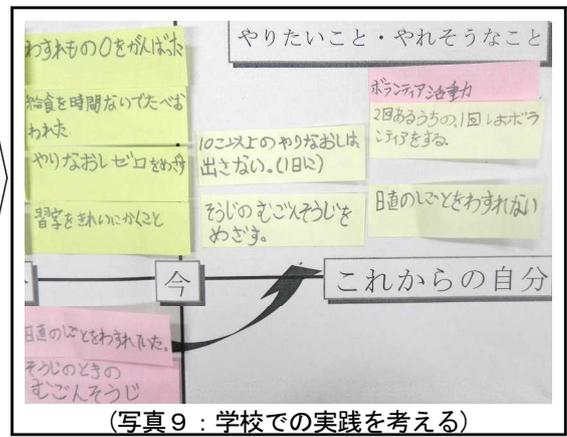
活動①	総合的な学習の時間の指導 10月 単元名 漁師の生き方から学ぶ
つなぐ	
活動②	「生き方教育」を取り入れた学級活動の指導 10月26日(検証授業Ⅲ) 1 題材名 「働くこと」について、自分のできることを考え、実行しよう 2 本時の目標 ○ 「働くこと」について想起させ、学校生活での自分を振り返ることによって、これから自分ができていることを考え、実行の計画を立てよう。 3 「生き方教育」の視点…自分をみつめる力を育てること 4 手立て ○ 自分の考えた生き方(写真8)を基にして、学校生活で「働くこと」ができることを考え、(写真9)に記入させる。 ○ 学期末に実践を評価カード(資料2)で振り返る計画を立て、実践意欲を高める。 5 成果 ○ 自分の苦手なことにも取り組もうとする気持ちをワークシート(写真9)に記していた。
つなぐ	
活動③	国語科の指導 3月 単元名 伝記「手塚治虫」

イ 実践にいかすためのワークシートの工夫

「生き方教育」の進め方(p15-3 図1)と同じ仕組みで、これまでの自分からこれからの自分を考えさせるワークシートにした。(写真9)のワークシートは、左下には、これまでの自分を振り返って、あまりできなかったことを記し、右上には、これからやることを記させた。



(写真8：自分の生き方を考える)



(写真9：学校での実践を考える)

ウ 実践Ⅲの考察 (○…成果、●…課題)

- 「生き方教育」を取り入れた学級活動の指導は、実践意欲の持続化を図ることができ、児童が、「働くこと」を意識し、自分のできることを行っていた。
- 計画したこと(資料2)を自己評価することによって、実践にいかされたことを実感するとともに「自分をみつめる力」も伸び、実践意欲の継続につながった。
- さらに、実践を継続させるためには、これからの教育活動にも「生き方教育」を取り入れていく必要がある。

名前		やることは、増やしてもよいが、本当に自分が <small>順は、変わってもよい。やりとげたら×</small>			
		できた…◎ やろうとした…○			
優先順位	やること	5年		6年	
		2学期	3学期	1学期	2学期
1	積極的に委員会活動やお手紙・伝・ボランティアをする。	◎			
3	先生などが話している大事なことを、たことばメモをとる。	○			
2	忘れずに、最後まであたえられたい仕事はやりとげる。	○			

(資料2：実践を振り返る評価カード)

- (4) 「生き方プラン」の見通し ～これからの実践Ⅳ：国語の伝記「手塚治虫」の指導に向けて～
 これまでの「生き方教育」を取り入れた取組を児童に想起させる。伝記「手塚治虫」の学習において、自分の生き方を作文に記すことにかすことができるようにする。
 このような見通しをもちながら、「生き方教育」を実践していくことが大切である。

- (5) キャリアシートで振り返る
 年間の「生き方教育」を児童に振り返らせ、自己評価によって成長を実感させたり、教師の児童理解に生かしたりするためにキャリアシートを作成し、活用した。

本キャリアシートでは、(資料3)の学年のテーマとして、第5学年の「生き方プラン」から焦点化した2つを記入させた。

これまでの「生き方教育」に関連させた取組を想起させるとともに、感じたことや考えたことを次年度にも引き継ぐことができるようにした。

加えて、教師からのコメントを下に記して、励ますことで継続の意欲を高めた。

本実践において、児童は、キャリアシートの振り返りによって、年間の「生き方教育」に対する意識の高まりを実感できた。

また、このキャリアシートは、学年のテーマに応じて取り組んだことを記入することによって、次の学年では、前年度の児童が、どのような取組を行っていたのかを把握でき、「生き方教育」をさらに充実させることができると思う。

わたしのキャリアシート
 (5)年 名前[]

どんな取組やできごとがありましたか ・そうごうの学習でお米を分けた。	《学年テーマ》 働くこと	どんな取組やできごとがありましたか ・そうごうで、あきらめない心を学習した。
感じたことや考えたことを書きましよう ・これからお米を大切にしていきたいと思った。		感じたことや考えたことを書きましよう ・私もあきらめない心を大事にしていこうと思います。
どんな取組やできごとがありましたか 委員会やボランティアに取り組んだ。		どんな取組やできごとがありましたか
感じたことや考えたことを書きましよう ペットボトルのキャンプ集めや草取りなどをして、かんきょうに関わることをした。	《学年テーマ》 自分の生き方について	感じたことや考えたことを書きましよう

(先生から) これからもお米を大切にするという気持ちをもち続けたいですね。かんきょうにかかわる活動もあきらめない心で続けていくことを期待しています。

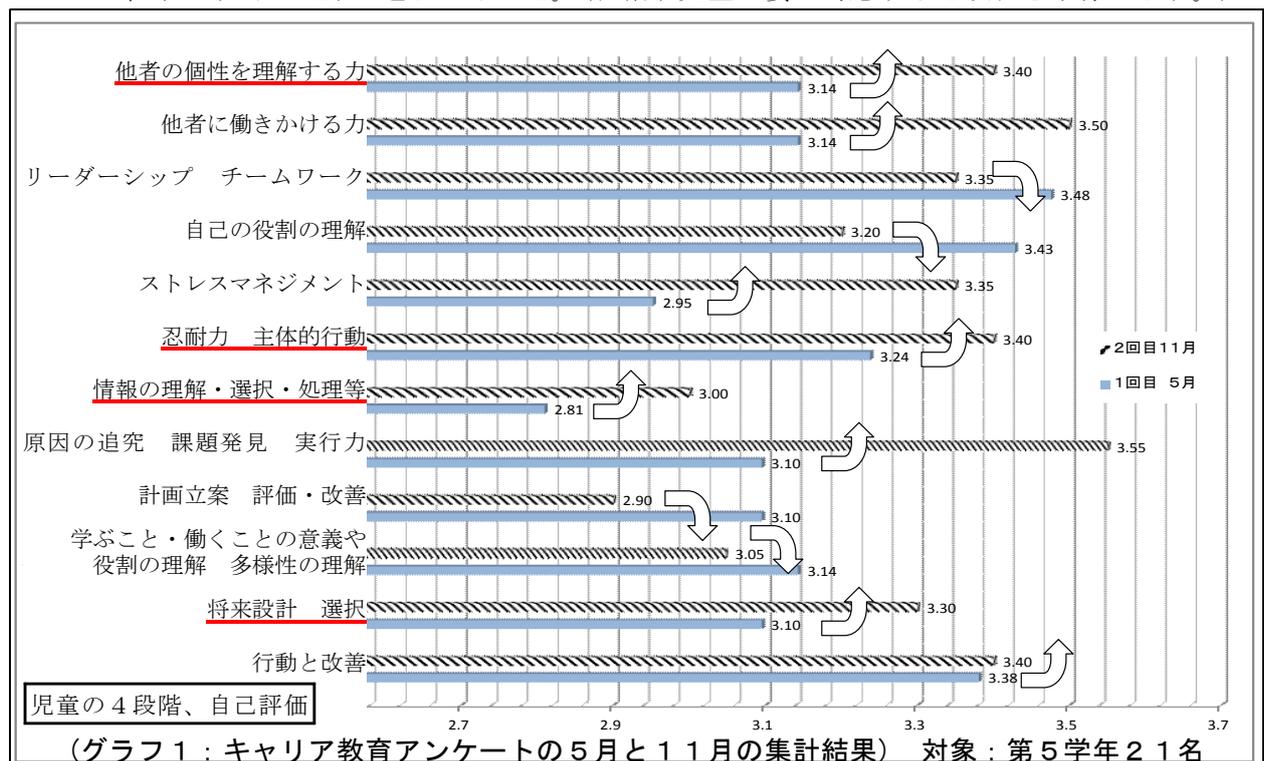
(資料3：児童のキャリアシート記入例)

VII 成果と課題

1 研究の成果と課題の分析

(1) 児童の実態調査からの変容

キャリア教育アンケートを第5学年の児童(21名)に2度(5月と11月)実施した結果が、下の(グラフ1)の通りであった。(目指す児童の姿に対応する4項目を下線で示す。)



- 相手の考えや気持ちを受け止めようとして聞くことができる児童に関連する他者の個性を理解する力は、3.14から3.40になり0.26ポイント上昇した。
- 苦手なことにも進んで取り組むことができる児童に関連する主体的行動の数値は、3.24から3.40になり0.16ポイント上昇した。
- 進んで資料や情報を集めたり、質問したりできる児童に関連する情報の理解・選択・処理等は、2.81から3.00になり0.19ポイント上昇した。
- 自分に必要なものを選択できる児童に関連する将来設計と選択は、3.10から3.30になり0.20ポイント上昇した。

本研究における4つの目指す児童の姿に対応する数値は、全て上昇した。(※ポイントとは、数値の平均である。児童の4段階、自己評価で、最大値4。)

また、情報の理解・選択・処理等の能力については、上昇しているが、3.00ポイントであり、2番目に数値が低い。さらに、ほかの4つの能力のポイントが下降している。

(2) アンケート結果の考察

- 目指す児童の姿に関連する数値が向上したことは、「人や社会にかかわる力」「自分をみつめる力」「課題を解決する力」「将来を見通す力」の能力の向上と言える。4つの生き方に役立つ力の向上によって、主体的に行動し、やりぬく力も伸びたとと言える。
- 「生き方に役立つ力」を短期的にまんべんなく向上させることは、難しい。本研究のように「生き方プラン」に基づき、焦点化した教育活動に「生き方教育」を取り入れて実践することが、目指す児童の姿に近づけることに有効である。
- 数値が低かったり、5月より下がったりした能力を伸ばすためには、その能力に応じた焦点化を行い、「生き方教育」を実践していく必要がある。現在の児童の実態と更に焦点化した「生き方プラン」を次年度へ引き継ぐことによって、「縦の接続」を図ることが有効であろう。

2 成果

- 意図的に関連付けたキャリア教育に関する指導計画に基づいて、焦点化した教育活動に生き方教育を取り入れて実践していくことによって、主体的に行動し、やりぬく力を身に付けた児童の育成に迫ることができたと考ええる。
- 実践研究を通して、「生き方に役立つ力」を伸ばす手立ての工夫・改善してきた結果、生き方にかかわる児童の意識が高まるとともに、自己の生き方を考えることができるようになり、主体的に行動し、やりぬく力を伸ばすことにつながった。
- 「生き方教育」を取り入れた実践は、教科・領域等の目標達成に効果的であるとともに、生き方に役立つ力を相乗的に伸ばすことができ、自己の生き方を考えることに有効であった。

3 課題

- 「生き方に役立つ力」を伸ばしていくためには、長期的な見通しで「生き方教育」に取り組む必要がある。そこで、本研究の「生き方プラン」の取組を次年度の学級担任へ引き継ぐことが必要である。さらに、学校全体での系統的な「生き方プラン」による取組が必要である。
- 小学校段階から中学校につながるというねらいから、小中一貫した、接続性のある「生き方プラン」を考える必要がある。また、教科担任制の中学校においても系統的な「生き方プラン」を作成し、組織的に取り組むことができるようにする必要がある。

《引用・参考文献》

「小学校キャリア教育の手引き(改訂版)」	文部科学省 (平成23年5月)
「第二次宮崎県教育振興基本計画」	宮崎県・宮崎県教育委員会 (平成23年)
「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」	中央教育審議会 (平成23年1月31日答申)
「キャリア教育を創る」	文部科学省 国立教育政策研究所 (平成23年11月)
「キャリア教育をデザインする」	国立教育政策研究所 (平成24年8月)
「京都市総合研究センター研究員報告書」	(平成23年)

I 研究主題と副題

「自閉症のある生徒の主体的に活動する態度をはぐくむ学習支援を目指して」
～「自立活動」の視点を取り入れた実態把握と学習指導を通して～

II 主題設定の理由

我が国が目指すべき社会の姿として、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う共生社会がある。本県においては、第二次宮崎県教育振興基本計画の施策に「共生社会を目指す特別支援教育の推進」が示されており、内容の一つとして「地域における教育・指導システムの充実と教員の指導力の向上」が掲げられている。この施策を受けて、特別支援教育の充実を図るためには、専門性を高め、障がいの特性を踏まえた学習指導等の質を更に高めていかなければならない。また、障がいの多様化が進む中で、今後、県民全体に対し障がいのある児童生徒の特性等の理解・啓発を図り、卒業後の自立と社会参加へ向けての協力を得ることも必要である。

宮崎県立延岡しろやま支援学校は、今年度より、肢体不自由教育部門、聴覚障がい教育部門、知的障がい教育部門を統合した県内初の総合特別支援学校として開校した。児童生徒が高等部卒業後に共生社会の中でたくましく生きていくために、キャリア教育等をもとに幼稚部（聴覚教育部門のみ）から高等部（肢体教育部門・知的障がい教育部門のみ）までの一貫した教育課程の再編成を行っている。学校教育目標は、「心豊かでたくましく地域社会で生きぬく力を育成する」であり、知的障がい教育部門の特色として「自閉症の専門的な指導に関する研究の実施～自閉症のある児童生徒が主体的に学習や活動へ取り組む環境を目指して～」がある。これまで、(旧)宮崎県立延岡たいよう支援学校においても自閉症教育の実践は行ってきたが、今後、さらに、自閉症に関する障がいの特性の理解や学習指導方法等の専門性を高めていくことが求められており、前述した知的障がい教育部門の特色は、本校の研究課題としても位置付けられている。

自閉症のある生徒の主体性を高めるには、「自立活動」の視点ときめ細かな配慮をもって学習指導にあたることが重要である。新学習指導要領の「自立活動」の区分は、これまでの「健康の保持」「心理的な安定」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」の5区分に「人間関係の形成」が新たに加わり6区分となった。この6区分26項目の中には、「自閉症に関する具体的指導内容例と留意点」が示されているものもある。

そこで、本研究では、まず、高等部3年の自閉症のある生徒を対象に「自立活動」の視点と障がいの特性や発達の段階を考慮した実態把握を行い、そして、この実態把握の結果をもとに、自閉症の特性と発達の段階、「自立活動」の視点を取り入れた「実態把握表と指導目標・支援内容表」を作成し、生徒の主体的な態度をはぐくむことを目指していくこととした。今後は、この「実態把握表と指導目標・支援内容表」が、自閉症のある児童生徒に対する学習指導・学習支援の参考となり、学級担任以外でも活用できることを目指していきたい。

本研究が、地域の教育機関や地域の福祉機関、また家庭等において、自閉症のある児童生徒への教育の課題解決の一助となり、本県が目指す共生社会を生き抜く児童生徒を育てることにつながることを考え、本研究主題を設定した。

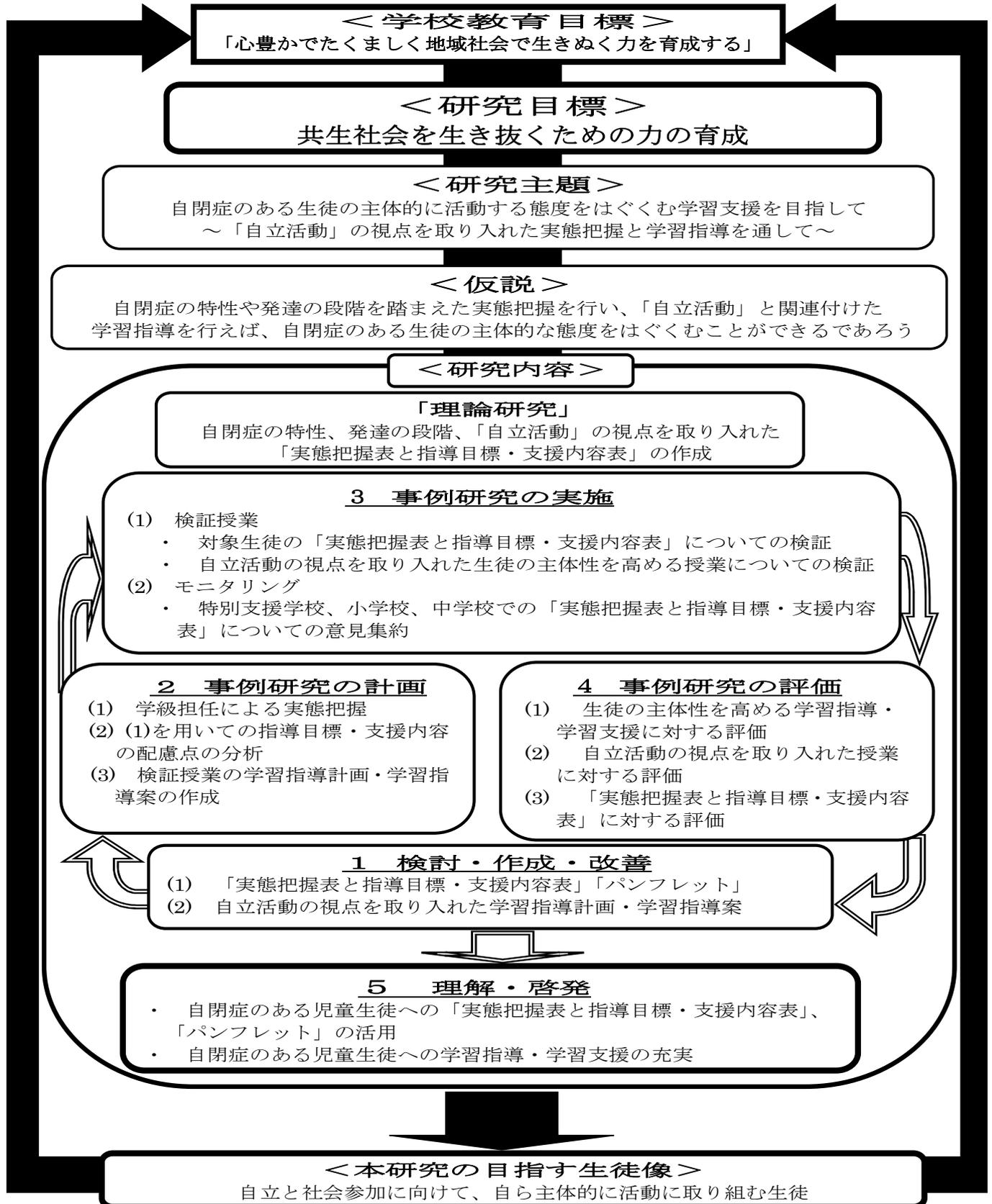
III 研究目標

「自立活動」の視点を取り入れた各教科等の指導目標・支援内容を検討していくことにより、学習指導・学習支援の質の向上を図って、共生社会を生き抜くための力を育成していく。

IV 研究仮説

自閉症の特性や発達の段階を踏まえた実態把握を行い、「自立活動」と関連付けた学習指導を行えば、自閉症のある生徒の主体的な態度をはぐくむことができるであろう。

V 研究構想



VI 研究の実際

1 研究の基本的な考え方

「自立活動」の視点を取り入れた実態把握について

○ 障害のある幼児児童生徒の場合は、その障害によって、日常生活や学習場面において様々なつまずきや困難が生じることから、小・中学校等の幼児児童生徒と同じように心身の発達の段階等を考慮して教育するだけでは十分とは言えない。そこで、個々の障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するための指導が必要となる。このため、特別支援学校においては、小・中学校等と同様の各教科等のほかに、特に「自立活動」の領域を設定し、その指導を行うことによって、幼児児童生徒の人間としての調和のとれた育成を目指しているのである。

(「特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編」より抜粋)

上記の「特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編」から、本研究においては、自閉症の特性、発達の段階、「自立活動」の視点を取り入れた実態把握より、自閉症のある児童生徒が自ら主体的に活動する態度をはぐくむ力を高めていくための指導目標・支援内容の研究を行う。

2 「指導・支援」と「主体的な態度」について

(1) 自閉症のある児童生徒の「指導・支援」

本研究における「指導」と「支援」は、下記のとおり定義する。

- ア 「指導」： 長期目標を達成できるように、児童生徒の発達の段階等の実態に応じた力をつけること。
- イ 「支援」： 児童生徒を様々な視点から理解し、長期目標の達成に向けて環境等を整えること。

(2) 自閉症のある児童生徒の主体的な態度

本研究における「自閉症のある児童生徒の主体的な態度」については、以下のとおりに定義する。「実態把握表と指導目標・支援内容表」に示す「指導目標」の各段階の達成を目指して、自分から行動し、さらには、一部支援を受けながら、地域社会等へ参加が可能になっていくこと。

3 理論研究

自閉症の特性、発達の段階、「自立活動」の視点を取り入れた「実態把握表と指導目標・支援内容表」の作成

(1) 「実態把握表と指導目標・支援内容表」について

ア 「実態把握表と指導目標・支援内容表」の作成

「実態把握表と指導目標・支援内容表」は、表計算ソフトを使用して作成した。これを活用しやすくするために、特別支援学校等の協力を得て、「実態把握表と指導目標・支援内容表」を使用して、活用についての意見を出してもらうモニタリングと所属校における生徒への検証授業、事前事後の検証により改善を行った。改善した「実態把握表と指導目標・支援内容表」の内容については、「長期目標」を新学習指導要領から自閉症のある生徒に関連する記述を整理し60項目にまとめた。さらに他の項目との関連も整理し記載している。そして長期目標の達成に向けた指導目標・支援内容を3段階に分けて設定した。検討した自立活動の6区分に関する「指導目標や支援内容等を表計算ソフトのシートに入

れて、①～③段階の児童生徒の達成したら、「1」と入力するようにした。これまで作成されていた「実態把握表」には、自立活動の視点から長期目標や指導目標・支援内容を段階毎に取り入れているものはない。

本研究においては、「実態把握表と指導目標・支援内容表」に、長期目標の達成に向けた指導目標を180項目、それに対応した支援内容を180項目、それぞれ自立活動の視点から設定した。その際、「指導目標 支援内容」における「各段階の内容の柱」の検討も行い、個別の指導計画や個別の教育支援計画の作成等にいかせるようにした。(資料①②)

イ レーダーチャートと3段階の指導目標・支援内容

「実態把握表と指導目標・支援内容表」では、指導目標・支援内容の分析結果をレーダーチャートに表記し、支援者が、自立活動の6区分の視点から児童生徒の特徴をすぐに捉えられるようにした。さらに、モニタリングの意見をもとに、①～③段の各段階の達成毎に「1」と入力できるようにした。また、児童生徒の実態によっては、長期目標が該当しない場合もあり、その場合は、指導目標①～③段階の全てに「1」と入力し達成したものとして扱い、レーダーチャートに児童生徒の特徴がよりきめ細かく表れるように改善した。(資料②)

段階	各段階の内容の柱
①段階	支援者のやり方等の手本を見て模倣することができる段階
②段階	言葉掛けや視覚支援教材等を利用しながら活動を行うことができる段階
③段階	必要な支援を受け、自立し主体的に社会参加することができる段階

【資料①：各段階の内容の柱】

○ 改善前の「実態把握表と指導目標・支援内容表（一部抜粋）」									
区分	項目	長期目標	1学期	2学期	3学期	「長期目標」達成に向けての指導目標・支援内容	他の項目との関連		
健康 健康の保持	(1)	手洗い、うがいをすることができる。	1			指導目標 ・ 支援者が手本を示して、模倣しながら、手洗い、うがいをすることができる。 ・ 言葉掛けや視覚支援教材を見ながら、手洗い、うがいをすることができる。 ・ 自分で手洗い、うがいをすることができる。 支援内容 ・ 手洗い、うがいのやり方を示す視覚支援教材を掲示する。	5 4 身環境の把握		
※表中の 5:00 は、5 歳を示す									
○ 改善後の「実態把握表と指導目標・支援内容表（一部抜粋）」									
区分	項目	長期目標	「長期目標」達成に向けての指導目標・支援内容			1学期	2学期	3学期	他の項目との関連
健康 健康の保持	(1)	手洗い、うがいをすることができる。	① 支援者が手本を示して、模倣しながら手洗い、うがいをすることができる。 ② 言葉掛けや視覚支援教材を見ながら、手洗い、うがいをすることができる。 ③ 手洗い、うがいをすることができる。			1			5 3 身人間関係の形成
			① 手洗い、うがいの動きのやり方の手本を示す。 ② 手洗い、うがいをするように言葉掛けや視覚支援教材を作成し示す。 ③ 学校や家庭で確実に実行できるように、手洗い、うがいをしたかどうかを振り返られるようにチェックシートなどを作成し示す。						
○ レーダーチャートによる表記。(P15-19【資料⑨】参照)									

【資料②：改善前・改善後の「実態把握表と指導目標・支援内容表」】

ウ 小・中学校等においての活用を目指して

「実態把握表と指導目標・支援内容表」が、小・中学校等においても活用できるようにするために、「実態把握表と指導目標・支援内容表」から「支援内容」と「他の項目との関連」を省き、別冊のパンフレット「自立活動の視点を取り入れた支援内容表」として、「支援内容」の説明と写真やイラスト等を加えて作成する。(資料③)

区分	項目	長期目標	「長期目標」達成に向けての指導目標・支援内容	1学期	2学期	3学期
1	健康 健康の保持	(1) 手洗い、うがいをすることができる。	指導目標 ① 支援者が手本を示して、模倣しながら手洗い、うがいをすることができる。 ② 言葉掛けや視覚支援教材を見ながら、手洗い、うがいをすることができる。 ③ 手洗い、うがいをすることができる。			

1 健康（健康の保持）の支援内容例		
長期目標	「手洗い、うがいをすることができる。」	
他の項目との関連	「4 場面や状況などを把握する力（環境の把握）」 「5 からだの動き(身体の動き)」	
指導目標①段階	支援者が手本を示して、模倣しながら、手洗い、うがいをすることができる。	
支援内容①段階	手洗い、うがいの動きのやり方の手本を示す。	
支援内容①の例	支援内容①の例について	児童生徒の実態に応じて記載
支援者が児童生徒に手本を示す。	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒に模倣させる場合、支援者は、児童生徒の横において、過敏を配慮しながら手を添えて、支援する。 児童生徒と対面して模倣させる場合、支援者と同じ手で手洗いやうがいをすることができるので、支援者は、児童生徒の鏡となるようにする。 	
指導目標②段階	言葉掛けや視覚支援教材を見ながら、手洗い、うがいをすることができる。	
支援内容②段階	手洗い、うがいをするように言葉掛けや視覚支援教材を作成し示す。	
支援内容②の例	支援内容②の例について	児童生徒の実態に応じて記載
 【手洗いカード】	掲示する視覚支援教材については、左記写真の下の説明文は、児童生徒の実態に応じて、平仮名のみにするなどの表記の工夫をする。	
指導目標③段階	手洗い、うがいをすることができる。	
支援内容③段階	学校や家庭で確実にできるように、手洗い、うがいをしたかどうかを振り返られるようにチェックシートなどを作成し、児童生徒がチェックできるようにする。	
支援内容③の例	支援内容③の例について	児童生徒の実態に応じて記載
 【チェックシート】	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒にチェックシートを使用させる場合、最初は、支援者が実際に「○」などの記入の仕方を示す。 	

【資料③：小・中学校等用の「実態把握表と指導目標表」・「自立活動の視点を取り入れた支援内容表」（下）】

エ 自立活動の関連図を作成し、支援者間で、他教科にも自立活動の視点を取り入れることを共通理解できるようにする。(P15-16 資料⑤)

4 事例研究

(1) 検証授業の実際

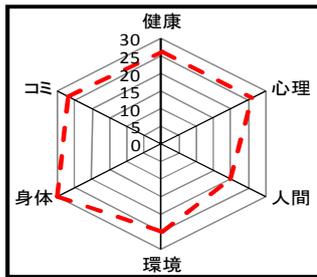
ア 学級担任による実態把握

作成している「実態把握表と指導目標・支援内容表」を活用し、学級担任が対象生徒の実態把握を行う。

イ 生徒Aのレーダーチャートの結果と分析

対象生徒のレーダーチャートの結果が、資料④である。生徒は、「身体の動き」には、問題がいたため、板書などの身体の活動を取り入れて賞賛をする。「コミュニケーション」については、ルールカードを利用する。「心理的な安定」「人間関係の形成」の課題は、T1（教員）が生徒の

様子を観察しながら、適切に言葉掛け等の支援を行っていく。



レーダーチャート内の「健康～コミ」の表記	
健康：健康(健康の保持)	心理：気持ちなどの内面(心理的な安定)
人間：人とのかかわり(人間関係の形成)	環境：場面や状況などを把握する力(環境の把握)
身体：からだの動き(身体の動き)	コミ：人とかかわるための手段(コミュニケーション)

【資料④】：レーダーチャートから分析する対象生徒 A の全体像】

ウ 授業の概要

高等部 3 年 (通常学級) 各教科等を合わせた指導「生活単元学習」

【単元名】
「自分のよいところとこれから努力することを知ろう」

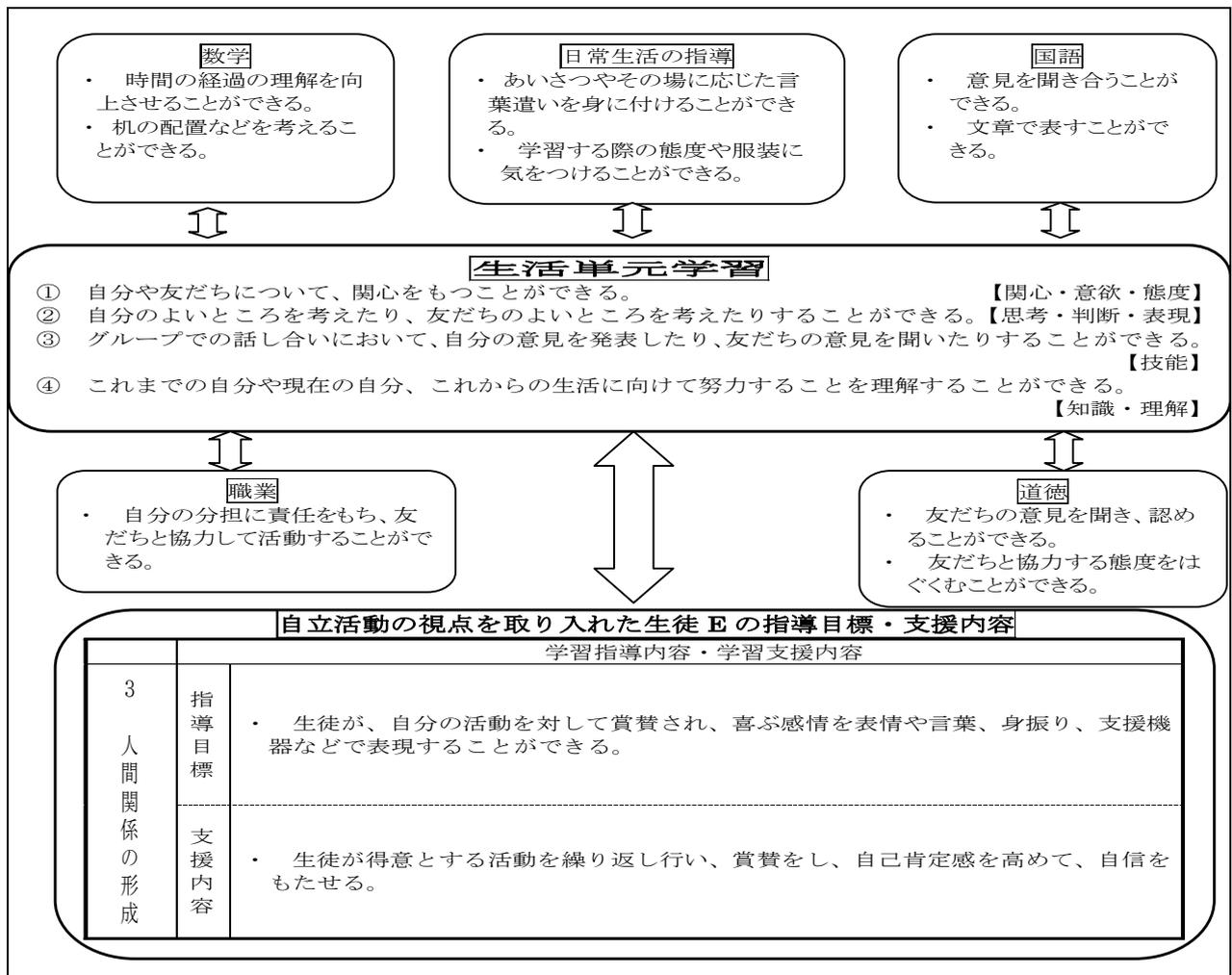
【本時の目標】

- 自分のよいところを考えたり、友だちのよいところを考えたりすることができる。 【思考・判断・表現】
- グループでの話し合いの中で、自分の意見を伝え、友だちの意見を聞いたりすることができる。 【技能】
- 自分のよいところとこれから努力することを理解することができる。 【知識・理解】

【本時の授業仮説】
本単元の目標達成に向けて、自立活動の「人間関係の形成」の視点を取り入れた指導・支援を行えば、生徒の人との関わる力や主体性を向上させていくことができるであろう。

エ 本検証授業で取り扱う生活単元学習と自立活動、各教科等との関連図

自立活動と各教科等の関連図を以下の通りとして、自立活動の視点を取り入れた学習支援を意識できるようにした。(資料⑤)



【資料⑤】：生徒 A へ身に付けさせたい力に関する自立活動と各教科等との関連図】

オ 本検証授業における対象生徒への「指導目標・支援内容」(資料⑥)

a 「実態把握表と指導目標・支援内容表」から読み取る生徒 A に関する自立活動における個別の目標

(a) 生徒 A についての本単元に該当する「区分」など

- ・ 「区分」について：人間関係の形成
- ・ 「内容」について：自分の得意なことや不得意なことがわかる → **本時の目標**
- ・ 「内容」達成にむけての学習指導内容・学習支援内容について

指導	1 段階	自信をもって取り組める活動がある。
	2 段階	児童生徒が、自分の活動に対して賞賛され、喜ぶ感情を表情や言葉、身振り、支援機器などで表現することができる。
	3 段階	自分の得意なものと不得意なものを理解して、言葉や身振り、支援機器などで表現することができる。
支援	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒が得意とする活動を繰り返し行い、賞賛し、自己肯定感を高めて、自信をもたせる。 ・ 児童生徒が、不得意な活動を行う場合は、教員がいつでも支援を受け止めることができるようにする。 	

(b) 生徒 A の「内容」：「自分の得意なことや不得意なことがわかる。」の達成状況について

生徒	達成	目標達成に向けての達成状況
A	未達成	2 段階： 生徒が、自分の活動に対して賞賛され、喜ぶ感情を表情や言葉、身振り、支援機器などで表現することができる。

(c) 目標設定の分析 アー(ア)、アー(イ)より、生徒 A の自立活動における個別の目標を設定

長期目標	・ 自分の得意なものと不得意なものを理解して、言葉や身振りで表現することができる。
短期目標	・ 生徒が、自分の活動を賞賛され、喜ぶことができる。

※ 短期目標を本時の目標に対応させていく。

b 本時の目標と自立活動における支援内容の設定について

「実態把握表と指導目標・支援内容表」からの目標や支援を本時に合うように検討し、下記(資料⑤)のように設定した。

氏名	本時の目標	本時の自立活動の支援内容
A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分のよいところを友だちから聞いて発表することができる。 ・ 視覚支援教材を通じて、活動することができる。 ・ 主体的に書いたり発表したりすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒 A が発言する内容などを賞賛し、自己肯定感を高めて、自信をもたせる。 ・ 生徒 A のよいところを賞賛し、自分のよいところについての理解を向上させる。

c 生徒 A の特性に応じた「実態把握表と指導目標・支援内容表」から読み取る本時の目標と自立活動の視点を取り入れた支援内容について

○ 対象生徒 A に関する本時の目標

生徒	単元に関する目標	支援内容
A	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>教員の言葉掛けのもと、視覚支援教材を見ながら、自分史を整理し、これまでの自分や現在の自分、これからの生活に向けて努力することを理解することができる。</u> ・ <u>言葉や身振りを使って、発表の場に応じた声の大きさと言葉遣いで話すことができる。</u> 	<p>生徒 A は、「実態把握表と指導目標・支援内容表」から、本単元の目標として「コミュニケーション」の項目(5)「その場の状況に応じた言葉づかいをすることが困難であり」、「環境の把握」項目の「(2)整理整頓を行うことが困難であり」が、本時の目標に適切であるとして設定した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>発表の方法を教員の手本と視覚支援教材で提示し、発表の方法を理解させる。</u> ・ <u>自分史のモデル提示し、これまでの自分や現在の自分、これからの生活に向けて努力することを理解させる。</u>

「実態把握表と学習指導内容・学習支援内容表」の該当する項目から記載する。

以上の視点を取り入れて、主体的に活動できるための支援を行う。

・ 主体的に活動することができる。

【資料⑥：対象生徒 A に関する本時の目標と自立活動における支援内容】

カ 検証授業の様子 (資料⑦)

学習内容及び学習活動	生徒 A に関する主な指導上の留意点(一部抜粋)
<p>導入</p> <p>1 始めの挨拶 2 本時の目標を知る。</p>	<p>T1 の発問等</p> <p>「それでは、A さん、今日の目標をホワイトボードに貼って、読んでください。」生徒 A の読む活動に対して、声の大きさなどについて、良かったところを賞賛し、自己肯定感が高まるようにする。支援が必要な場合は、生徒 A 用カードを提示する。</p> <p>目標の掲示の際には、ホワイトボードと目標の用紙に緑色のマーキングをして、掲示の支援をしている。自閉症の特性を考慮し、視覚的に情報を整理するために、各活動に関連する教材だけを提示し、不必要な教材を外す支援を行った。</p> 
<p>展開②</p> <p>6 課題解決に向けて</p> <p>(1) 目標の課題解決をする。 (2) 発表の準備 (3) 発表</p>	<ul style="list-style-type: none"> 自分のよいところやこれから努力することを考えて記録用紙に書く。わからない場合は、友だちに質問する。 頼むとき用の支援カードを活用できるようにする。 <p>T1 の発問等</p> <p>(DVD 終了後)「先生は、自分は、みんなに負けないように練習をしたけれど、結果は駄目でした。そして、落ち込みました。でも、立花さんが「誰よりも頑張っていた。」と言ってくれたときに嬉しかった。今日は、皆さんも自分のよいところや友だちの良さを考えて、伝え合ってください。」</p>  <p>生徒 A は、よいところについて、はじめは、支援カードを書写したが、「がんばったことがあるかな」と言葉掛けを行うと、自分で「よいところ」を考え書くことができた。</p>  
<p>終末</p> <p>7 まとめ 8 終わりの挨拶</p>	<p>生徒たちの発表の内容や話し合っていた時の様子を賞賛する。生徒 A の発表内容について、確認をし賞賛し、お互いを認め、これからの生活に生かすように意識を高めさせる。次時の予告をする。終わりのあいさつを行い、学習の終わりを意識する。</p>

【資料⑦：検証授業の様子】

キ 検証授業による分析と検討

「実態把握表と指導目標・支援内容表」による主体的に活動する態度をはぐくむ学習指導・学習支援について

(7) 「成果」

- 生徒 A に関して、「実態把握表と指導目標・支援内容表」からの分析をもとに、視覚支援教材として支援カードを使用した。この支援カードの使用により、生徒 A が自ら自分のよいところを考えて、文章で表現するという主体的な活動を導き出すことができた。
- 「実態把握表と指導目標・支援内容表」の指導目標に、「児童生徒が得意とする活動を繰り返し行い」という表記をしている。生徒 A が得意とする「身体の動き」にかかわるホワイトボードへの掲示や机移動などの活動を取り入れたことで、学習活動に対して、主体的に活動しようとする意欲を導き出すことができた。この指導目標は適切であったと考える。

(4) 「課題」

- 「実態把握表と指導目標・支援内容表」に表記している「指導目標」と「支援内容」が、段階別になっていないために、「指導目標」と「支援内容」を対応させることが難しかった。この「指導目標」と「支援内容」を段階毎に分けて対応させていくことが課題である。

(2) モニタリングによる「実態把握表と指導目標・支援内容表」の検証

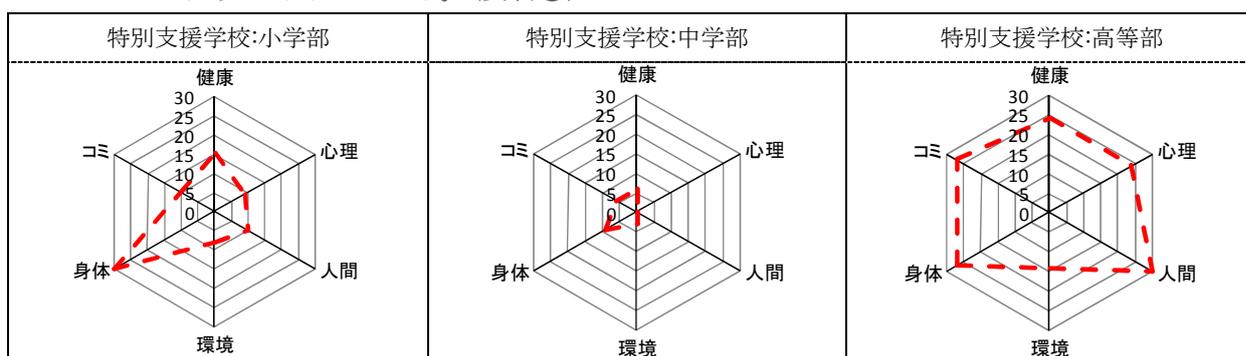
資料⑧は、各校種の教員にモニタリングを実施し、その対象となった児童生徒数である。

特別支援学校			小学校（3名）	中学校（1名）
小学部（7名）	中学部（7名）	高等部（10名）		

【資料⑧：モニタリングをした児童生徒数】

ア モニタリングからのレーダーチャートの結果(一部抜粋)

レーダーチャートの結果より、自閉症という障がい名は同じであるが、実態は様々であることがわかる。そのため、「実態把握表と指導目標・支援内容表」で児童生徒の実態把握を行い、各段階の「指導目標・支援内容」を分析し、きめ細かな指導・支援を行っていくことが大切であるといえる。(資料⑨)

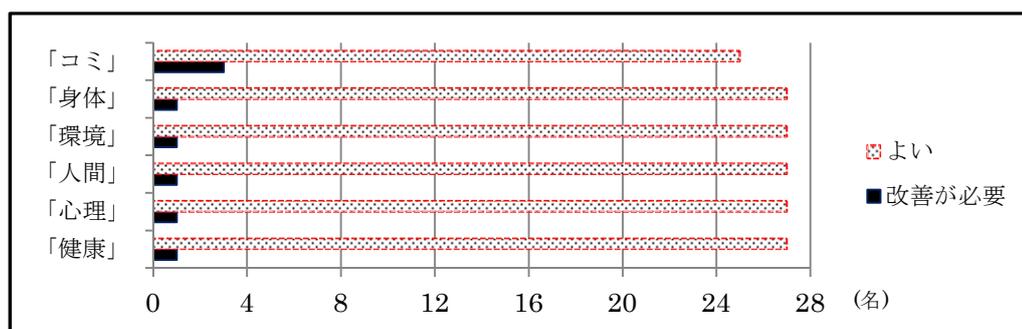


【資料⑨：モニタリングからのレーダーチャートの結果（一部抜粋）】

イ 「実態把握表と指導目標・支援内容表」に対するモニターの見集約

(ア) アンケートの回答

アンケートの項目は、「実態把握表と指導目標・支援内容表」の中で表記されている自立活動の6区分に関する「自閉症の特性をおさえられていたか。」等である。この項目に関する回答結果は、資料⑩のとおりである。



【資料⑩：「実態把握表と指導目標・支援内容表」に対するモニターの見集約結果】

(イ) 「実態把握表と指導目標・支援内容表」のチェックに要した平均時間→35分

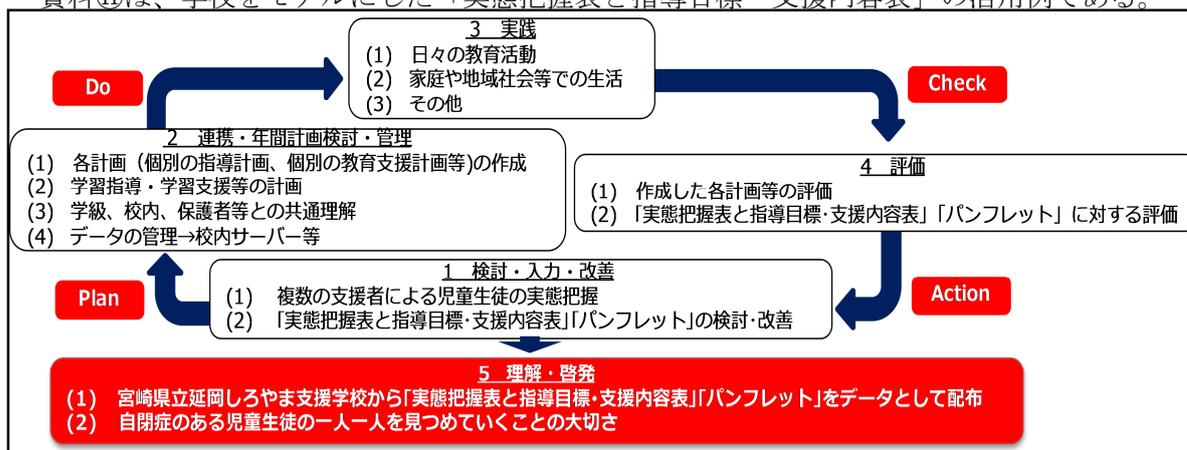
(3) 検証授業とモニタリングによる「実態把握表と指導目標・支援内容表」の改善

検証授業とモニターの見集約を参考にして、下記の3点を改善した。

- ・ 「実態把握表と指導目標・支援内容表」に記載している「長期目標」の達成に向けた「指導目標」と「支援内容」を3段階に分けて対応させた。
- ・ 場面や状況に関する表記を、誰もが活用できるように、具体的な表記にした。
- ・ パンフレットに、支援者が児童生徒の引き継ぎ事項等を記載し、個別の指導計画等の作成資料とするために、「児童生徒の実態に応じて記載」という欄を設定した。

5 「実態把握表と指導目標・支援内容表」の活用に向けて

資料⑩は、学校をモデルにした「実態把握表と指導目標・支援内容表」の活用例である。



【資料⑩：「実態把握表と指導目標・支援内容表」の活用例】

VII 成果と課題

1 成果

- 「自閉症のある生徒の主体的に活動する態度をはぐくむ学習支援」を目指して、自立活動の視点を取り入れた指導目標・支援内容の柱を3段階に分けて設定した。これにより、自閉症のある生徒に対して、より正確な実態把握ができ、主体的に活動する態度をはぐくむための個々の特性に応じたきめ細かな学習支援を行うことができた。
- 「実態把握表と指導目標・支援内容表」では、指導目標・支援内容の分析結果をレーダーチャートに表し、児童生徒の特徴を自立活動の6区分の視点からすぐに捉えることができるようにしたため、児童生徒の学習支援に有効に活用できた。
- 当初、「実態把握表と指導目標・支援内容表」は、特別支援学校での活用を目指していた。しかし、今後の特別支援教育の充実に向けて、小・中学校等用の「実態把握表と指導目標表」と別冊として、写真やイラスト等で具体的な支援内容を記載しパンフレットの作成に着手し、初めて特別支援教育に携わる方々でも活用できるものにすることを目指すことにした。

2 課題

- 「実態把握表と指導目標・支援内容表」では、「およその必要な発達の段階の力」の欄を設定し、自閉症のある児童生徒の学習支援に「発達の段階」を関連付けていけるように、研究を進めてきた。しかし、「発達の段階」を記載するには、さらに細かな分析が必要であり、今後、指導目標に応じた「発達の段階」の記載をすることが課題である。

《引用・参考文献》

「特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部・高等部）」

文部科学省（平成21年）

「第二次宮崎県教育振興基本計画」

宮崎県・宮崎県教育委員会（平成23年）

「特別支援教育ガイドブック」

宮崎県教育委員会 特別支援教育室（平成20年）

「自立活動 学習内容要表」

長崎自立活動研究会（平成22年）

「自閉症児の発達単元267」

佐々木正美／青山 均監訳 岩崎学術出版社（平成元年）

《研究実践校》

宮崎県立延岡しろやま支援学校